





NPO法人日本ビーチ文化振興協会 朝日健太郎理事長

# NEXT STAGE

## Association for Beach Life Japan

### ビーチ文化は 次のステージへ

「海辺の文化の創造を目指して立ち上がった日本ビーチ文化振興協会が、17年に創立15周年を迎えた。これまでの活動や取り組みを年表にまとめ、朝日理事長から挨拶として、これまでの想いや今後のビジョンを聞いた。

「02年より、我が国における新たな海辺文化の創造を目的に活動を続けて参りました。そして17年、本当に多くのお支えのおかげで、我々NPO法人日本ビーチ文化振興協会が創立15周年を迎えることができました。これまで物心共にご協力を頂いた皆様へ、協会スタッフ一同改めて御礼を通じ上げます。また、ビーチを通じて多くの仲間と知り合い、そして全国のビーチで賑わいを起こしてきました。このご縁にも感謝の気持ちを伝えたいと思います。

「つ前の世代を振り返ると、我が国の海辺の活動といえは主に海水浴でした。また日本らしいビーチ文化は根付いておらず、夏休みが終わる9月に入るとビーチから人が誰もいなくなった情景を思い返します。しかし時代は移り変わり、今ではビーチスポーツや様々なアクティビティに活用されるビーチ空間へと進化を遂げていきました。少しづつ理解され、必要とされてきたという状況を日々実感しています。また、海辺がない地域においては、内陸に砂を敷き、はだしになれるビーチ環境を造りだしています。

このビーチ文化の進化の過程の中で、日本ビーチ文化振興協会が「一つ、二つとはだしの足跡を残し、我が国のビーチ文化のさらなる進化に寄与できるよう、次のステージへとチャレンジします。そして日本のビーチ資源が世界へ誇れるようになります。努力を続けてまいります。引き続きご理解とご協力をお願いをし、皆様への15周年のご挨拶といたします」

年	内容
2000	シドニー五輪において、日本でもビーチバレーボールが注目を集め、ビーチバレーボール女子日本代表監督 瀬戸山正二が日本の海辺文化の大改革について語ったことで反響を呼んだ。
2002	6月 国土交通省港湾局にて「新たな海辺の文化の創造研究会」(座長 川勝平太)が発足。佐伯美香氏がビーチバレーボール普及活動として委員就任。小委員会として「ビーチスポーツ研究会」を発足。日本ビーチバレーボール連盟理事長 瀬戸山正二が副会長に就任。国土交通省港湾局機関誌「波となぎさ」に「新たなビーチ文化の創造」のタイトルで21世紀における日本の理想的ビーチ文化のあり方などを掲載。
2003	10月 ビーチバレーボールアジアを中心に「日本ビーチ文化振興協会」を創立。
2003	5月 国土交通省、環境省、厚生労働省、東京都港湾局他の後援により、ビーチスポーツを中心とした海辺の通年利用の促進を図る啓発実験イベントとして、ビーチライフの前進となる「第1回ビーチスポーツin ODAIBA」を東京・お台場で開催。
2004	5月 東京都港湾局の臨海副都心地域賑わい創出の社会実験として「お台場ビーチバレー」がスタート。現在(2017年)では約年間30大会、周辺動員数約37,000人が集まる大会として継続。
2006	4月 「スポーツのみならず、環境、健康、教育、癒し、食、伝統など様々な分野において可能性を秘めているビーチ」という観点から、「ビーチライフinシリーズ」を展開。東京お台場で「第1回ビーチライフinお台場」をスタート。同年6月には愛知県新舞子マリナパークにて「第1回ビーチライフin新舞子」、7月には茨城県常陸那珂海浜水浴場にて「第1回ビーチライフin新舞子」、翌年の10月には新潟県日和田山浜海水浴場にて「第1回ビーチライフin新潟」がスタートした。
2008	4月 「ビーチアスリートを中心に海辺の環境問題に取り組む『海辺を守ろう運動』」を協会と日本ビーチバレーボール連盟の協働で活動をスタート。海辺のコピペでも多いペットボトルキャップの回収を全面呼びかけ、それを使用したエコビーチを制作し海辺へ寄贈する活動を実施。
8月	朝日健太郎理事長(現理事長)が北京五輪ビーチバレーボール日本代表選手として出場。
10月	第1回「アジアビーチゲームズ」がインドネシア・バリで行われ、日本ビーチ文化振興協会メンバーと有識者を中心に視察を行う。
2009	8月 神奈川県川崎市「川崎マリエン」に、名称「日本ビーチ文化振興協会推奨ビーチスポーツ施設」が設立。海辺以外での内陸にビーチスポーツ場を企画・コーディネート。ビーチスポーツ専用砂を研究し「黒髪サンド」を開発。
2010	8月 HADASHI事業スタート。美しい砂浜で「はだし」になる機会を増やせるよう、海辺の環境についてメッセージを発信する「メッセージ展2010」を開催。「海辺を守ろう」をテーマにデザイン画を一般募集し、Tシャツにプリントしたものをお台場ビーチで一気に展開し、全国へ海辺の環境について考えようと発信。
2013	1月 理事長に朝日健太郎が就任。
2014	6月 遊佐雅美理事(現副理事長)を中心として日本ビーチ文化振興協会柏崎支部(新潟県柏崎市)を発足。ライフセーバーの活動を主軸に、「海辺の正しい知識」や「自分の身は自分で守る事」を広めるため、イベント、講習会を中心に活動。
4月	アジア各国、また今後世界で行われるビーチスポーツの祭典「ビーチゲームズ」の日本代表選手を擁護し、「ビーチゲームズ日本招致プロジェクト」を発足。朝日健太郎、浅尾美和がナビゲーターに就任。
2015	1月 協会情報誌「はだし文化新聞」発行スタート。当協会の活動を中心に、識者との対談、おらが街自慢、砂ソムリエなどのコーナーで海辺に関心のない方にも情報を発信することを目的として年間3回、15,000部発行。
2016	8月 全国の海岸を持つ自治体管理団体を会員とする「日本一美しい豊かな砂浜海岸のまち協議会」を京丹後市と共同で発足。全国で57団体が加入され、日本の海辺の連携を図る。
1月	当協会副理事長に遊佐雅美が就任。
2017	2月 「ビーチゲームズ日本招致プロジェクト」の一環として「日本におけるビーチスポーツのあるべき姿」としてビーチスポーツから海辺文化を創出する」を主軸とし、産官学連携の勉強会を年4回開催。
7月	15周年事業として、更なるビーチ文化の創造を啓発するため、「なみのいの日」の読書と7月第3日曜日「海の日」と8月11日「山の日」の間曜日でもある7月31日を記念日「ビーチの日」として制定。



遊佐氏の決勝レース

### 柏崎の海を守る女王、復活。遊佐氏、22度目の日本一。

日本ビーチ文化振興協会副理事長の遊佐雅美氏が10月7、8日、神奈川県藤沢市で開催された全日本ライフセービング選手権大会ビーチセービング女子競技で3年ぶり22度目の優勝に輝いた。

水難事故を想定した訓練の成果を競うビーチセービングは、砂浜にうつ伏せになりラグスタート時、即座に起き上がり、20メートル先にあるチューブを取り合う競技。今年44歳となった遊佐氏は、昨年のレースでは負傷に泣いたが、今年は前回王者である25歳の但野安菜選手に勝利し、人命救助にかかわるライフセーバーに求められるのは15メートルをこなす耐久力、いいスタートを切るための集中力と瞬発力、そして全速力で保つ視野の広さと判断力。それらの能力を積み上げるため、遊佐氏は地元・柏崎の海で同じライフセーバーの夫とトレーニングを切磋琢磨し行ってきたという。遊佐氏は「今年、21歳の伊達公子女さんが46歳で引退された。それを見ると私も体力の続く限り、競技を続けていきたい」と、遊佐氏は今後の心技体を限界に引き上げ、自らのも柏崎の海を見守り続ける。



第43回全日本ライフセービング選手権大会表彰式

### 兵庫県神戸市 須磨海岸

第9回 砂ソムリエ

元プロビーチバレーボールプレイヤー・朝日健太郎が各地の砂を踏んで選ぶ「砂ソムリエ」は、足跡の数で評価する。足跡3つが最高だ。さて連載第9回で取り上げるのは、兵庫県神戸市の須磨海岸の砂。

2017年5月、ついに高次元ビーチが誕生した。神戸の海水浴場として親しまれてきた須磨海岸がリニューアルされ、親水からスポーツまで幅広く受け入れられる素晴らしいビーチがそこに浮かび上がった。ポイントには、砂面が2階層に分けられている。上段のアクティブエリアの砂は、色粒とも均一に保たれたソフトタッチの砂。下段のリラックスエリアの砂は、唐津から運び入れた砂で、見た目・感触も海水浴や親水にベストマッチである。今回のソムリエは、砂のみならず、施設、環境と横断的な視点で捉えた。砂とロケーションの相乗効果がとても新鮮に感じられ、全国に誇れるビーチの誕生に拍手を送りたい。

左: アクティブエリアの砂  
右: 波打ち際の砂

色: 白色度  
粒: サイズの均一度  
グリッド: 踏んだときの剛柔  
感触: 踏んだときの気持ちよさ

総評価: <strong>「はだし」1つ半!!</strong>

### Beach Athlete Interview 5

「ビーチアスリートを追え」

## 吉田隼也

子どもの頃に経験があるドッジボールは、日本が世界になれるスポーツ

ランナーとしてやり続けたいと思えない。大人が部活でいた時には「子どもはスポーツだ」という声がありました。日本代表ができた時は周りの選手たちが日本代表として挑戦することに気恥ずかしさを感じていて、自分も私自身は恥ずかしいと思つたことはあります。海外でもドッジはあります。複数ボールを同時に使うルールですが、世界にもつながっている。ビーチドッジもプレーされています。世界で広がっていく可能性があります。それに日本人はキャッチングをはじめとしたボールに対する

ドッジボールの魅力は、多岐にわたりますが、実は日本が世界になれるスポーツなんです。ラジールでは子どもの頃から誰もがやるのでサッカーが文化になっていますよね？日本ではドッジがそうです。僕がドッジの競技に初めて出会ったのは小学生の時。その大会の後、日本ドッジボール協会が設立され、子どもだけでなく大人の大会、日本代表もでき、ビーチドッジも流行るようになってきました。それらを見させていただいて、競技者として幸せで運がよかったですね。だから僕は今36歳になりますがトップ



選手兼監督として競技の魅力伝えていきたいという吉田選手

下: ジャパンビーチゲームズフェスティバル2017でパフォーマンスを見た



上: 選手兼監督として競技の魅力伝えていきたいという吉田選手

### New Sports Power ⑦

(ビーチで生まれた新競技)

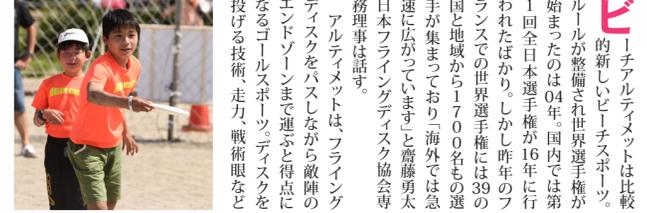
## ビーチアルティメット Beach Ultimate

自由で、総合的に高い能力が必要な究極のスポーツ



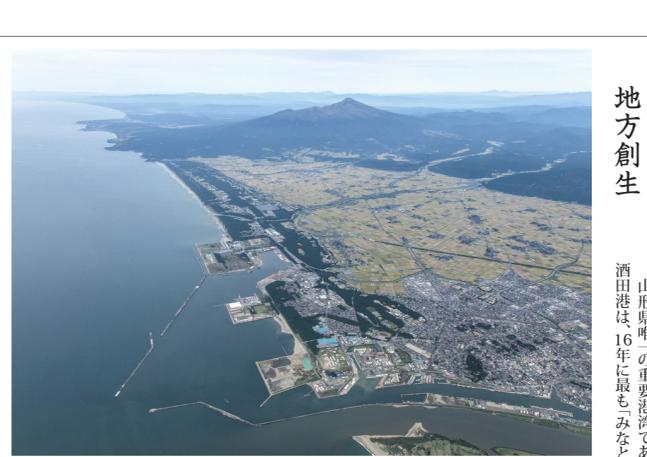
上: 直径27cm、重さ175gのフライングディスクを味方にパスしてキャッチする

下: ジャパンビーチゲームズ2017でも体験が行われ、子どもたちも楽しんでた



ビーチアルティメットは比較的新しいビーチスポーツ。ルールが整備され世界選手権が始まったのは04年。国内では第1回全日本選手権が16年に行われたばかり。しかし昨年のフランスでの世界選手権には39の国と地域から1700名もの選手が集まっています。海外では急速に広がっています。齋藤勇太日本フライングディスク協会専務理事は話す。

アルティメットはフライングディスクをパスしながら敵陣のエンドゾーンまで運ぶと得点になるゴールスポーツ。ディスクを投げる技術、走り、戦術眼など



「ポート・オブ・ザ・イヤー2016」を受賞した酒田港



「おらが街の味」

### 大浜海岸の賑わいからの地方創生

山形県の北部、日本海に面し、北に鳥海山、南に月山を望み、庄内平野の中央を流れる最上川の河口に開かれた酒田市は、江戸時代には北前船交易によつて、湊町、商人の町として栄えた街。北前船文化は、17年4月に「荒波を越えた男」が訪れた異空間、北前船寄港地「船主集落」が全国10自治体とともに日本遺産の認定を受けた。山形県唯一の重要港湾である酒田港は、16年に最もみなとの

元気を高めた港湾として、ポートオブザ・イヤー2016を受賞しました。受賞理由の一つもある。酒田港におけるコンテナ取扱貨物量は、14年から3年連続で過去最高を更新し、17年もその記録を上回る勢いで推移しています。

東京以外で初となる「健さBAR」の開催。酒田ビッグビーチエスタのビーチイベントを通して、朝日理事長と酒田市民は、大いに交流を楽しみました。